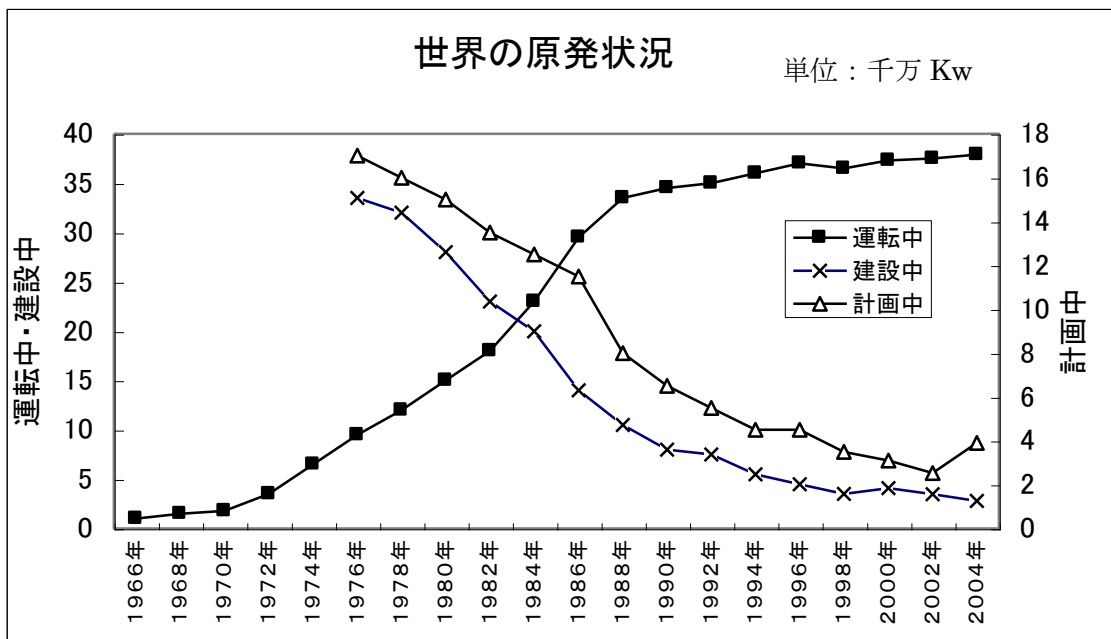


————— チェルノブイリ原発事故の残したものの（その2） —————

チェルノブイリ事故からもうじき20年。世界に大きな衝撃を与えたこの事故は、その後の世界と日本のエネルギーの未来にどのような影響を与えたであろうか。北朝鮮やイランの核開発が話題になるこの頃、何が本当の問題なのか、核廃棄物と私たちの未来などを来年4月まで考える。



上の図は、世界の運転中、建設中、計画中の原発の発電能力の推移を示したものである。2004年末現在、世界全体では434基の原発が稼働しており、約3.8億Kwの発電能力がある（上図）。上の図で分かるように、原発の建設と計画は1970年代末から下り坂になっている。これは1979年のアメリカのスリーマイル島原発の重大事故の影響があると見られる。スリーマイル事故は、爆発こそしなかったものの、事後調査で厚さ20センチの圧力容器に亀裂が走り、きわどい事故だった事が分かっている。しかし、世界の原発の未来に決定的影響を与えたのは、やはり1986年のチェルノブイリ事故である。この後、建設中、計画中とも急

に減少し、運転中の原発も増加しなくなったことが上の図でも明らかである。即ち、原発は終わりの始まりを迎えたのである。現在運転中の原発の80%以上は運転暦15年以上で、今後急速に廃炉の時代を迎える。すでに、世界中で廃炉になった原発は、117基（3600万Kw）に上る（主なものは、アメリカ23基、イギリス22基、ドイツ19基、ロシア12基、フランス11基）。今後原発からの撤退を決定または検討中は、ベルギー、ドイツ、イタリア、オランダ、スウェーデン、スイスなどである。日本も今後新たな原発建設は困難で、政府は既存原発の延命処置を目指している。しかし、それは事故と背中合わせである。（河田）